

財團法人松江市教育文化振興事業團

松江市教育委員會

平成24(2012)年3月

王子城遺跡挖掘調查報告書

國立病院機構松江医療センターへ一外来管理診療科等建設整備工事記録

例　言

1. 本書は、平成23年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した国立病院機構松江医療センター外來管理診療棟等建替整備工事に伴う王子坂遺跡発掘調査報告書である。

2. 本書で報告する発掘調査は独立行政法人国立病院機構松江医療センターから松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。

3. 本調査を実施した遺跡の名称及び所在地は、以下の通りである。

名　　称　　王子坂遺跡

所　在　地　　松江市上乃木5丁目483番

4. 現地調査期間

北側調査区　平成23年4月11日～6月17日

南側調査区　平成23年10月3日～11月4日

5. 開発面積及び調査面積

開　發　面　積　　5,235m²

調　査　面　積　　1,093m² (北側調査区 672m²・南側調査区 421m²)

6. 調査組織

依　頼　者　　独立行政法人国立病院機構松江医療センター 院長 徳島　武

主　体　者　　松江市教育委員会

事　務　局　　松江市教育委員会 教　育　長　福島　律子

　　文化財課　　課　　長　錦織　慶樹

　　調査係　　係　　長　赤澤　秀則

　　専門企画員　曾田　健

　　主任　川上　昭一

調　査　指　導　島根県教育庁　　文化財課　　文化財保護主任　松尾　充晶

　　島根県立三瓶自然館サヒメル　　指　導　員　中村　唯史

実　施　者　　財団法人松江市教育文化振興事業団 理　事　長　松浦　正敬

　　埋蔵文化財課　　課　　長　藤原　博

　　調査係　　係　　長　中尾　秀信

　　専門企画員　後藤　哲男

　　調　査　員　廣瀬　貴子（担当者）

　　調査補助員　宇津　直樹

7. 調査に携わった発掘作業員

安達　福、石倉　春枝、岩成　博美、内田　英輔、金津　善雄、木村　司、柿本　健介、

加藤　恵治、小松原　茂、齊藤　幸夫、田中　俊江、土江　惟夫、中村　道夫、中村　勇一、

野津　益夫、宮田　真吾

8. 本書に記載した遺物の実測・復元・淨書、遺構図版作成は以下のものが行った。

飯野　正子、宇津　直樹、廣瀬　貴子

9. 本書に掲載した現場写真、遺物写真は宇津直樹、廣濱貴子が撮影した。
10. 本書の執筆・編集は松江市教育委員会文化財課の協力を得て、廣濱貴子が行った。
11. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。
- (弥生土器) 松本 岩雄「出雲・隠岐地域」「弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編」1992年
- (弥生土器、土師器) 鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5」1992年
- (土師器) 松山 智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」「鳥根考古学会誌 第8集」1991年
- (須恵器) 大谷 晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「鳥根考古学会誌」第11集1994年
12. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、標高値は海拔標高を示す。
13. 各調査区の遺物取上グリッドの区画名は、世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値を5m毎に区切り、北側調査区から南側調査区の順に、行・列とも連続した番号・文字を各グリッドの設定起点から割り振った。
14. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
- SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SP：柱穴 SA：杭列
15. 掃図番号は通し番号とし、掃図、図版における遺物番号は遺構ごとに記載した。
16. 出土遺物、実測図及び写真等は松江市教育委員会で保管している。



島根県・松江市位置図

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	3
第3章 調査の成果	6
第1節 北側調査区	6
第2節 南側調査区	14
第4章 まとめ	21
遺物觀察表	22
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	王子坂遺跡位置図	1
第2図	開発範囲・調査範囲図	2
第3図	王子坂遺跡と周辺の遺跡分布図	5
第4図	北側調査区グリッド配置図	6
第5図	北側調査区 調査成果図	7
第6図	北側調査区 土層断面図	8
第7図	北側調査区 A～C層出土遺物(1)	10
第8図	北側調査区 A～C層出土遺物(2)	11
第9図	集石遺構実測図	12
第10図	集石遺構出土遺物	12
第11図	SA01・02実測図	13
第12図	SD01実測図	13
第13図	南側調査区グリッド配置図	14
第14図	南側調査区 調査成果図	15
第15図	南側調査区 土層断面図	16
第16図	南側調査区 土層内出土遺物	17
第17図	SB01実測図	18
第18図	SB02実測図	18
第19図	SB03、SA03実測図	19

写真図版目次

南側調査区から東側を望む（松江医療センター病棟屋上から）		
図版 1	北側調査区 調査前全景（北東から）	
	北側調査区 調査後全景（松江医療センター病棟屋上、南西から）	
図版 2	北側調査区西側 調査後（南から）	
	南壁土層断面（北西から）	
図版 3	南東側 SA01・02、柱穴（南西から）	
	西側 SD01、柱穴（東から）	
図版 4	集石遺構 碠検出状況（北から）	
	集石遺構 完掘状況（北から）	
	SD01土層断面（東から）	
図版 5	SD01穴掘状況（東から）	
	遺物検出状況	
	遺物検出状況	
図版 6	南側調査区 調査前全景（北東から）	
	南側調査区 調査後全景（松江医療センター病棟屋上、西から）	
図版 7	西側 SB01、柱穴（南東から）	
	東側 SB02・03、SA03、柱穴（南西から）	
図版 8	北側調査区 A～C層出土遺物	
図版 9	北側調査区 A～C層出土遺物	
図版10	北側調査区 集石遺構出土遺物	
	南側調査区 土層内出土遺物	

第1章 調査に至る経緯と経過

独立行政法人国立病院機構松江医療センターでは、老朽化が進み、手狭ともなっている外来管理診療棟の建替工事を行うこととなった。建替にあたっては、現在既存建物より0.8mほど高所に位置する旧病棟跡の更地を掘削し、5,235m²の平場を造成して外来病棟及び管理棟を新築する事業である。

この事業に先立って、平成22年10月1日、松江医療センターから、松江市文化財課に外来管理診療棟等建替整備工事予定地内における埋蔵文化財有無の照会が行なわれた。当該地については、病院施設として利用されているものの、過去に埋蔵文化財の確認調査が行われた実績がない未調査地であることから、試掘調査が必要であるとの回答を行なった。これを受け、同年10月18日に埋蔵文化財の分布・試掘調査依頼書が提出され、11月2日に試掘調査を行なうこととなった。

試掘調査は、開発予定地内に3.0m×1.5mトレンチ3本（T1～T3）を設定して実施したところ、T2トレンチから古墳時代と考えられる遺物が出土した。このため、T2トレンチ周辺に更に3本のトレンチ（T4～T6）を追加設定して遺跡の範囲確認に努めた。

調査の結果、丘陵に挟まれた谷状の地形を検出し、ここに流れ込んだ遺物包含層であることが判明した。ただし、基本的には山を削って造成が行われた後に鉄筋コンクリートの大型建物が建設されていたため、現況地表面下70cm～175cmは完全に攪乱を受けており、遺跡が遺存しているのはT2トレンチ周辺のごく限られた範囲であった。

発見された遺跡は、当地の小字名をとって「王子坂遺跡」として11月5日に試掘調査の回答を行った。

平成23年1月25日に文化財保護法第96条の届出が提出され、3月14日には本発掘調査の依頼が提出された。これを受けて外来管理診療棟建設地の本発掘調査を財團法人松江市教育文化振興事業団に発注し、平成23年4月11日から6月17日までの間で実施した。

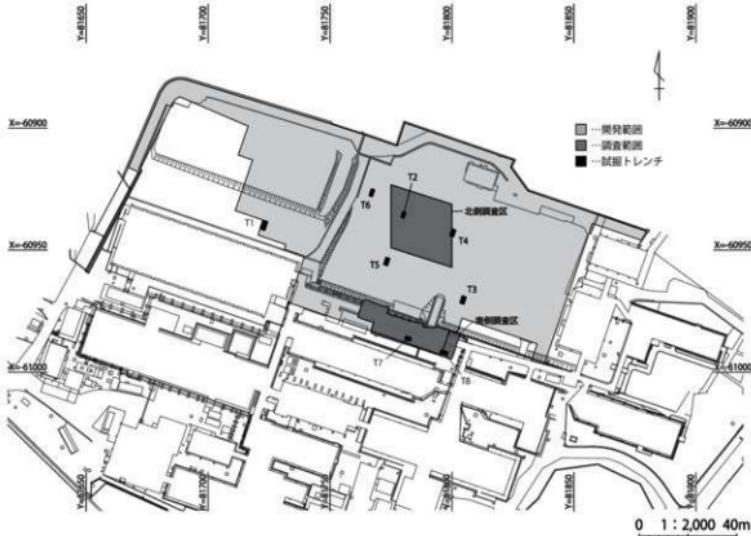


第1図 王子坂遺跡位置図 (S=1:30,000)

本発掘調査を実施中の5月30日、事業主体者から当市文化財課あてに事業範囲の変更の協議があつた。これは、当初予定されていた外来管理診療棟建設予定地を南側に変更し、既存建物の出入口と新築建物の出入口を一直線につなげることで、各建物間の動線を短縮し、更なる利便性の向上を図るものであった。

追加された建設予定地にも遺跡が広がっている可能性が高く、ひとまず遺跡の広がりを確認するための試掘調査を行なうこととした。調査は、拡張された開発予定地内に2本のトレンチ（T7・T8）を設定して6月16日に実施している。T7からは谷部に堆積した遺物包含層を検出し、T8からは地山に掘り込まれた柱穴1個を検出した。これにより、追加開発予定地内にも王子坂遺跡が広がっていることを確認した。遺跡保護のための協議がなされたが、患者の利便性を考えると計画変更は困難との結論に達し、10月3日から11月4日までの期間で追加の本発掘調査を実施することとなった。

調査区については、当初の本調査区を王子坂遺跡とし、追加調査区を王子坂遺跡（Ⅱ期）として遺物の取り上げ等を行ったが、報告書の掲載にあたっては、当初の本調査区を北側調査区、追加の本調査区を南側調査区として記載し、第3章に掲載している。



第2図 開発範囲・調査範囲図 (S=1:2,000)

第2章 位置と歴史的環境

松江市は島根県北東部に位置する。北側には島根半島の丘陵地帯が、そして南側には中国山地の北縁部が位置している。松江市の中心地である市街地は、東を中海、西を宍道湖に挟まれており、宍道湖東岸の松江平野に立地している。

王子坂遺跡は松江市街地南郊、上乃木5丁目683番に所在する。昭和11年の地形測量図に調査位置を照らし合わせると、通称「檜山」と呼ばれる標高約65mの低丘陵から南西方向に派生する低丘陵と低丘陵との間、谷部の始まりのような所に位置する。「檜山」の北側眼下には松江市街地が一望され、西北方には宍道湖を隔てて島根半島の北山山系を見ることができ、また、南東側に茶臼山、南西側に国史跡である田和山遺跡(27)を眺望できる。

本遺跡地は、昭和14年12月10日、日中戦争除隊後の療養施設、軍事保護院傷痍軍人島根療養所として開設され、太平洋戦争の末期には陸軍病院の分院として役割をはたした。終戦後、昭和20年12月に国立島根療養所と改称し結核専門の施設となり、昭和46年11月には国立松江病院と統合され国立療養所松江病院となった。平成16年4月に国立病院・療養所の独立行政法人化に伴って、国立病院機構松江病院となり、平成20年4月に現在の病院名に改称され現在に至っている。現在の地形は、昭和14年に療養所が開設される際に、丘陵の一部が削平された為と思われる。

旧石器時代 王子坂遺跡周辺で旧石器時代の遺構は確認されていないが、田和山遺跡や廻田遺跡(92)から玉髓製のナイフ型石器が出土している。

縄文時代 王子坂遺跡周辺の田和山遺跡、袋尻遺跡群(23)、福富I遺跡(32)、松本古墳群(35)、二ツ縄手遺跡(83)、大角山遺跡(99)から縄文土器が出土している。他に有舌尖頭器が採取された福富湖岸遺跡(90)、石鏃の散布地である奥山遺跡(18)、下沢遺跡(77)、石斧が採取された乃白遺跡(85)、屋形遺跡(93)などが知られている。遺構としては福富I遺跡の落とし穴状土坑が確認されているだけで、他に明確な遺構は発見されていない。

弥生時代 王子坂遺跡の西側には石斧が採取された宇賀I遺跡(4)と宇賀II遺跡(5)が所在するが、詳細は不明である。本遺跡付近でこの2遺跡の他に遺跡は確認されていなかったが、平成23年度に本遺跡から南に450mの後廻遺跡(2)の発掘調査において、弥生時代中期から古墳時代前期の集落跡が発見され、遺跡密度が疎である当地域において貴重な資料となった。

他に弥生時代の遺跡としては、田和山遺跡、友田遺跡(28)が著名である。田和山遺跡は三重の環壕や多くの建物跡が検出された遺跡で、多くの土器や石鏃、つぶて石などが出土し、弥生時代前中期から中期の遺跡である。友田遺跡は弥生時代中期から後期にいたる墳墓群である。墳丘墓や土壙墓群、四隅突出型墳丘墓など数多く検出され、土壙墓は石鏃の検出状況から戦士たちの集団墓地であった可能性も考えられている。他に門田遺跡(88)から弥生時代中期の溝状遺構や分銅型土製品が、福富I遺跡、廻田遺跡、勝負奥遺跡(109)からは弥生時代後期の堅穴建物跡が検出された。弥生土器や石製品、木製品が出土したものとして雲垣遺跡(86)、欠田遺跡(33)、袋尻遺跡、南友田遺跡(29)などがある。

古墳時代 古墳時代に入ると松江平野周辺は遺跡が急増するが、それらの多くは古墳や横穴墓である。前期古墳としては袋尻遺跡群の4・8号墳があり、土器棺墓が検出されている。本遺跡周辺で

最も古い中期古墳は長砂古墳群（17）である。方墳15基、円墳3基からなり、古式須恵器の樽型瓶などが出土している。中期後半以降の古墳は多い。前方後円墳の大角山1号墳（全長61.4m）（34）、前方後方墳の乃木二子塚古墳（全長36m）（15）が築かれたことは注目される。また、小規模ながら後期には前方後円墳である田和山1号墳が築かれており、中期以降同じような場所に前方後円墳などが連続して築かれたことは、この地域の重要性、優位性を示しているのかもしれない。他に向荒神古墳（7）や屋形遺跡の屋形1号墳、向原古墳群（30）、二名留古墳群（91）があり、向荒神古墳は、周濠を有する一辺18mの方墳である。二名留古墳群からは箱式石棺が検出され、鰐状突起を有する子持勾玉が出土している。

6世紀後半以降横穴墓が多く造られるようになり、王子坂遺跡の北側にはひとつの前庭部を共有して6穴の横穴が穿たれた美月横穴墓群（110）があり、他に弥陀原横穴墓群（107）、奥山遺跡、袋尻遺跡の横穴墓群、菅沢谷横穴墓群（24）などが周辺に所在する。

古墳以外では、大角山遺跡、乃白玉作跡（96）、乃白権現遺跡（106）、田和山遺跡（A遺跡）など多くの玉作遺跡が確認されており、当地域の特徴の一つにあげることができる。これらは玉類の原料となる瑪瑙、碧玉の原産地である花仙山周辺に営まれていた集落である。

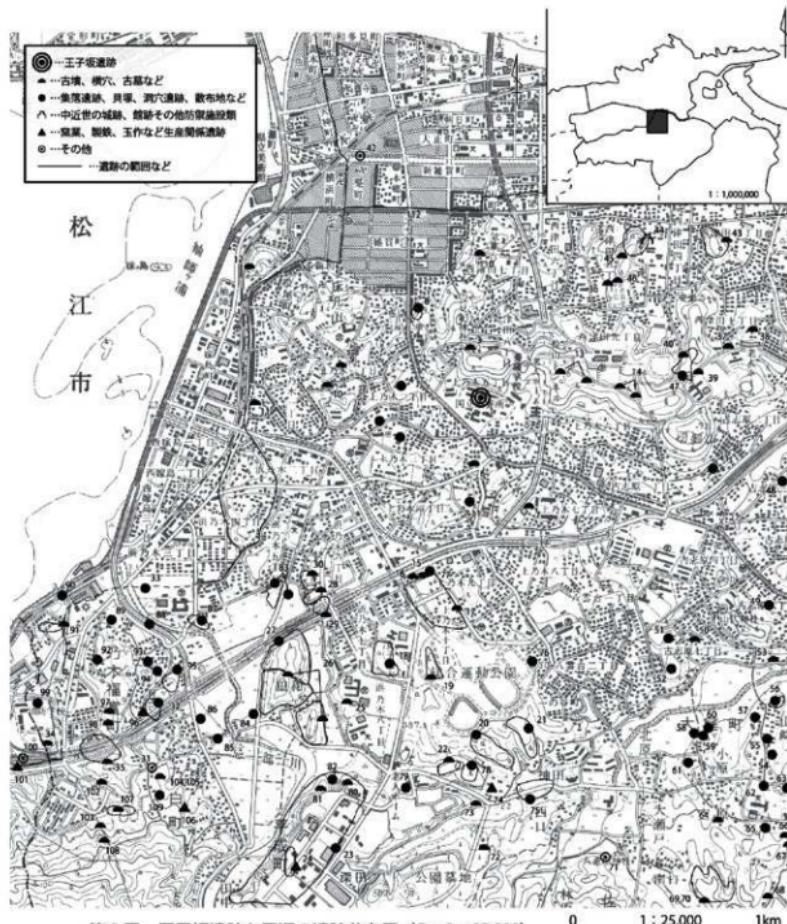
奈良時代以降 奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には、東西を結ぶ官道、古代山陰道（正西道）について記載されている。松本古墳群（35）や勝負谷遺跡（22）、楷松遺跡（78）からは道路状遺構が検出され、古代山陰道の推定ルート上にあたることからその可能性が高い。

中近世の遺跡の調査例は少なく、福富I遺跡からは中・近世の住居跡や土坑墓、落とし穴状遺構が検出され、当地域における人々の生活が窺われる。古墓としては、袋尻遺跡群で12基の古墓群が確認されている。銭貨や骨蔵器、五輪塔が出土し、14世紀後半頃のものと考えられている。また、本遺跡北側丘陵には中世末から近世の古墓が17基発見された檜山古墓群（3）がある。鏡や錫杖頭、結製金具、人骨などが出土し、修驗者独自の墓地として使用された可能性が指摘されている。この他、近年調査が行われた乃木西廻遺跡（111）の土坑からは、多数の土師器皿や椀、鍋、中国製褐釉陶器の四耳壺が出土し、13世紀代の祭祀遺構の可能性が考えられている。

尼子、毛利の戦いを記した『陰徳太平記』によれば、乃木地内において毛利の武将本城常光と尼子の武将本田豊前守が戦った乃木合戦があったとされ、宇賀（毘沙門古墳（9）近く）の毘沙門堂境内には尼子地蔵が祀られている。

【参考文献】

- 松江市乃木公民館『乃木郷土誌』平成3年
- 建設省松江国道工事事務所 烏根県教育委員会『福富I遺跡 屋形1号墳』1997年
- 烏根県教育委員会「松江・檜山古墓群」「烏根県埋蔵文化財調査報告書」第Ⅲ集 昭和46年
- 松江市教育委員会（財）松江市教育文化振興事業団「田和山遺跡発掘調査報告書1・2 田和山遺跡」2005年
- （財）松江市教育文化振興事業団「乃木西廻遺跡」「埋蔵文化財年報X 1」2008年
- 松江市教育委員会「美月横穴墓発掘調査概要報告書」2007年
- 松江市教育委員会「松江園都市計画事業乃木土地区調整備事業区内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」1983年



第3図 王子坂遺跡と周辺の遺跡分布図 (S=1: 25,000)

0 1: 25,000 1km

1 王子坂遺跡 (D109)	24 鶴谷町古墳群 (D815)	47 鶴谷遺跡 (D547)	70 鹿神田・猿谷横穴群 (D44)	93 星形遺跡 (D21)
2 後山遺跡 (D101)	25 後山古墳 (D619)	48 藤丘坂遺跡 (D11)	71 藤丘遺跡 (D312)	94 通水坂遺跡 (D22)
3 横山古墳群 (D300)	26 田和山古墳群 (D483)	49 山代神社跡遺跡 (D369)	72 小食見古墳群 (D548)	95 松木遺跡 (D21)
4 千賀川遺跡 (D256)	27 田和山古墳 (D815)	50 向山西古墳群 (D339)	73 騰負古谷古墳群 (D700)	96 乃白玉作跡 (D318)
5 千賀川遺跡 (D269)	28 友田遺跡 (D545)	51 香ノ木沢遺跡 (D870)	74 深田遺跡 (D653)	97 森木谷古墳群 (D559)
6 綾瀬川遺跡 (D254)	29 鳥居山古墳群 (D711)	52 鳥居山古墳群 (D711)	75 佐野古墳群 (D591)	98 大森山遺跡 (D715)
7 犬伏山遺跡 (D58)	30 丹波古墳群 (D853)	53 山田古墳群 (D471)	76 矢の原古墳群 (D714)	99 大舟山遺跡 (D715)
8 西ノ森遺跡 (D255)	31 松木坂古墳群 (D62)	54 9号墳跡 (D65)	77 下穴遺跡 (D1)	100 在玄名の地遺跡 (G189)
9 関沙門山古墳群 (D60)	32 福富1号墳 (D257)	55 BI0遺跡 (D677)	78 開松遺跡 (D850)	101 青雲堂跡 (G81)
10 岩神山遺跡 (D33)	33 BI1遺跡 (D678)	56 BI1遺跡 (D678)	79 佐野古墳 (D885.7)	102 佐野古墳 (D11)
11 佐々木高塚遺跡 (D298)	34 大内山古墳群 (D620)	57 BI2遺跡 (D79)	80 大久庄古墳群 (D661)	103 松木大穴群 (D64)
12 松江藩主・庭園・施設所 (D299)	35 松木本遺跡 (D856)	58 BI3遺跡 (D680)	81 野向古墳 (D114)	104 騰負田塚古墳群 (D833)
13 奥金見古墳群 (D512)	36 通井古墳群 (D508)	59 BI4遺跡 (D681)	82 曽宮湖跡 (D187)	105 騰負佐古墳群 (D644)
14 宮豊古墳群 (D511)	37 塚ヶ谷横穴群 (D506)	60 BI5遺跡 (D682)	83 鳥居山古墳群 (D980)	106 佐野古墳 (D104)
15 佐野古墳群 (D56)	38 佐野古墳群 (D507)	61 BI6遺跡 (D681)	84 事田遺跡 (D117)	107 佐野古墳 (D486)
16 佐野古墳 (D1)	39 田浦古墳群 (D559)	62 大和小学校松原遺跡 (D487)	85 白石遺跡 (D271)	108 佐野古墳 (D43)
17 長砂古墳群 (D544)	40 諫田古墳群 (D510)	63 B3遺跡 (D699)	86 香垣遺跡 (D882)	109 騰負奥遺跡 (D108)
18 奥山遺跡 (D811)	41 吉志山遺跡 (D254)	64 香ノ木澤古墳 (D689)	87 福富II号墳 (D70)	110 大森横穴羣 (D1070)
19 佐々木古墳群 (D42)	42 佐々木古墳 (D688)	65 幸古墳群 (D645)	88 福富I号墳 (D688)	111 佐野古墳 (D1044)
20 あヶ谷遺跡 (D65)	43 東城・前瀬遺跡 (D867)	66 佐古墳群 (D645)	89 神立遺跡 (D20)	112 山邊塚 II (G206)
21 神田遺跡 (D66)	44 西城・后瀬古墳群 (D866)	67 秋山古墳群 (D860)	90 福富湖跡遺跡 (D256)	
22 蔵負古墳群 (D664)	45 城・后瀬古墳群 (D513)	68 大石横穴羣 (D37)	91 二名古墳群 (D484)	
23 袋尻遺跡群 (D858)	46 小沢穴古墳群 (D278)	69 神谷・後古墳群 (D45)	92 萩田遺跡 (D716)	

※ ()内は各遺跡遺跡番号を示す

※ 太字は本文中に記載した跡

第3章 調査の成果

第1節 北側調査区

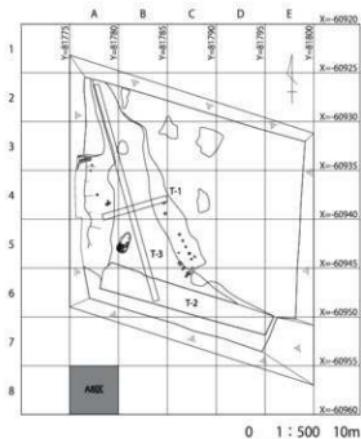
1. 調査の概要（第4・5図、図版1・2）

北側調査地は以前病棟が建っていたところで、現況は更地である。開発範囲のうち、建築物の地下構造の影響を受け、また、試掘調査において遺物包含層が確認された範囲について調査を行うこととなった。調査範囲は松江市教育委員会の指導のもと設定を行い、東西28m、南北24m、面積672m²について調査を行った。

試掘調査結果から現況地表面下約1.75mまで搅乱を受け、それ以下で遺物包含層を確認しており、最初に調査区北西端から搅乱土を重機により掘削し、遺物包含層の検出を行った。遺物包含層は丘陵に挟まれた谷の堆積土で、平面的には調査区西側半分で認められ、北側から南側に向かって「ハ」の字状に広がっていた。調査区東側半分は、地山以下まで搅乱を受けている部分であったため、これ以上調査を行わないこととなった。

土層観察のため遺物包含層の中央付近と南端に東西のトレンチ（T-1・T-2）を、また、南北方向にもトレンチ（T-3）を入れて土層観察を行い、無遺物層まで確認を行った。本報告においては、T-1、T-2の土層断面のみを記載する。

調査の方法は、調査区を国土地標に当てはめ、X=-60920、Y=81775の交点を基点に5m間隔でグリッドを設定し、基点から東へアルファベット、南へ数字を各区画に順に割り当て、その番号を各区画の呼称（例A8区）とし遺物の取り上げを行った。遺物の多くは西側から出土し、多時期の遺物が土層内に混在している状況であった。摩滅したもの、小片（破片）のものが多く、復元し完形となったものは1点のみであった。

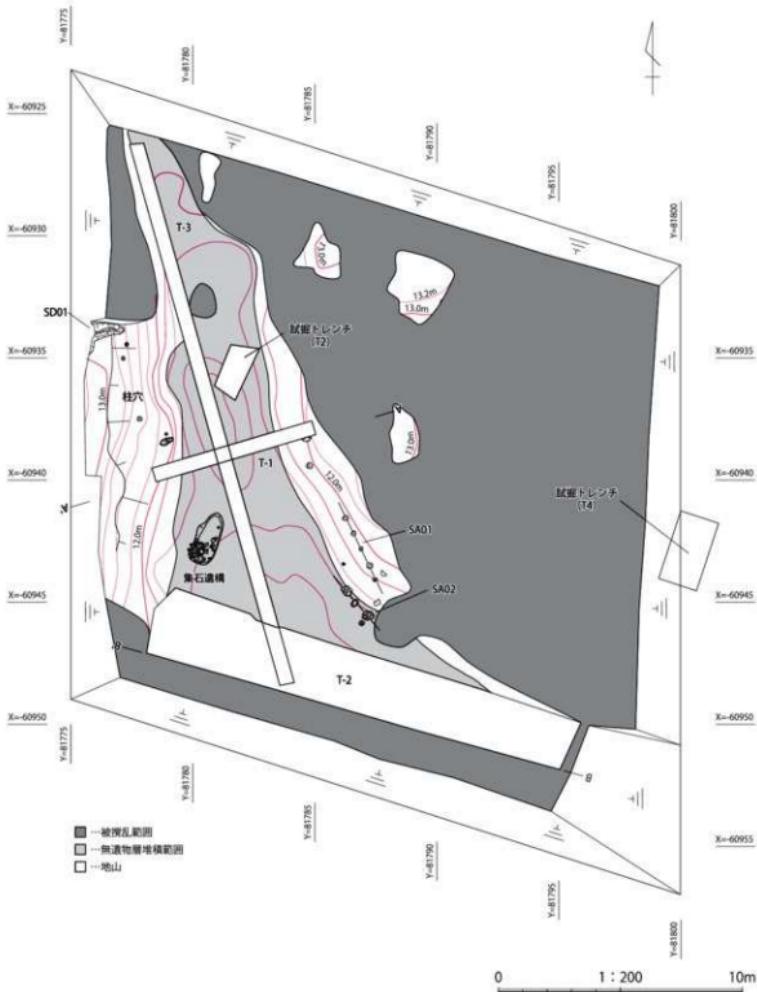


第4図 北側調査区グリッド配置図(S=1:500)

遺構は、谷の東西地山面から杭列2本（SA01・02）、溝状遺構1本（SD01）、柱穴10基を、堆積土上面から集石遺構1基を検出した。

2. 土層堆積状況（第6図、図版2）

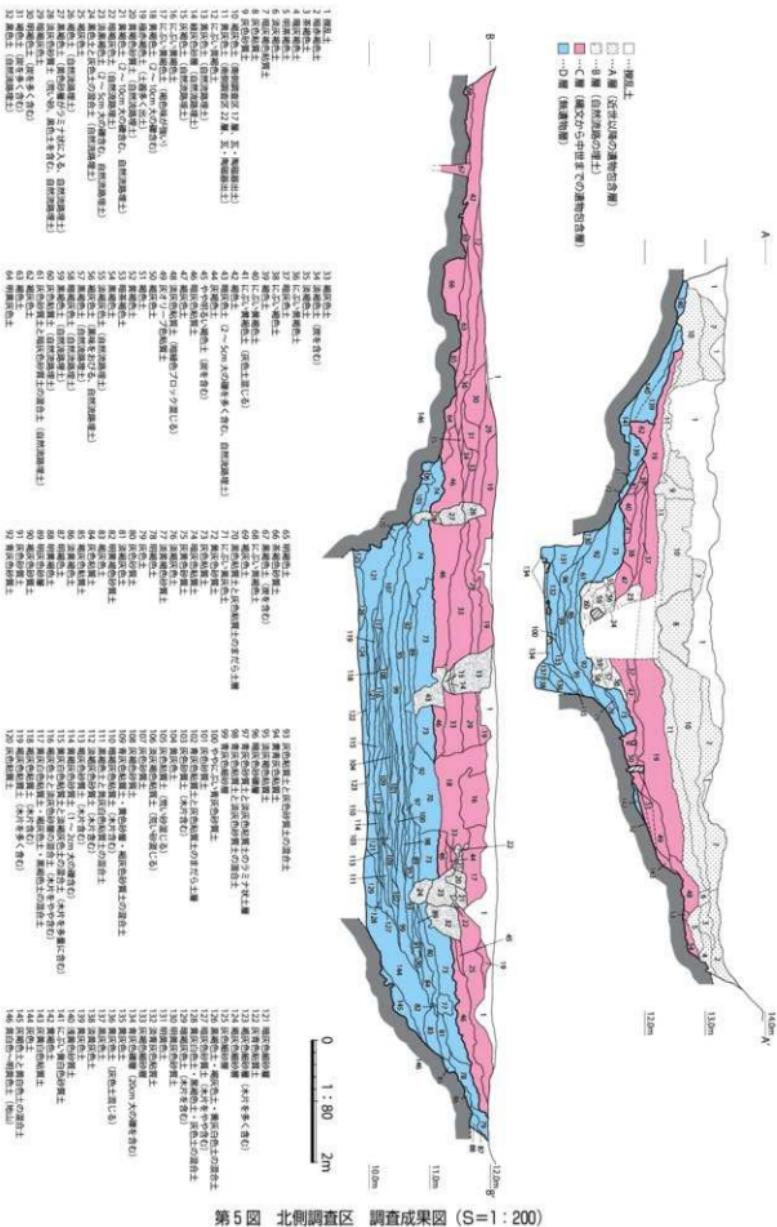
調査区内の現地表面標高は、13.8～14.0mを測り、搅乱土を取り除き、検出した遺物包含層上面の標高は12.1～12.3mである。谷の上端は削平され、谷底まで完掘していないので、明確な谷の規模はわからないが、南側土層断面から南側上端幅11.2m、深さ1.7m以上あったと考えられる。搅乱土下で確認した、谷の堆積土の概略を述べると、A層（近世以降の堆積土）、B層（自然流路の埋土）、C層（縄文時代から中世以前の遺物包含層）、D層（無遺物層の堆積土）となる。A層からC層までが遺物包含層である。



第5図 北側調査区 調査成果図 (S=1:200)

A層（近世以降の堆積土）

擾乱土直下で確認した土層である。谷の北側から南側にかけて全体的に堆積していたが、南端では北側から南側にかけて、擾乱を受けた際に削平されたと思われ確認していない。暗灰色から褐灰色系の粘質土で、下層にいくほど黒味を帯びていた。A層からは陶磁器、瓦が出土している。



第5図 北側調査区 調査成果図 (S=1:200)

B層（自然流路の埋土、図版2・3参照）

B層は自然流路の埋土である。自然流路は検出状況や土層観察から、堆積土を削り蛇行しながら幾度となく流れていたようである。自然流路は、幅の割に深く、また、5cm大の礫やブロック土を含んでいるものも認められた。このような自然流路は、地表面が木や草が生えていない裸地化した状態か、人為的に整地され草などがない状態のところにできたものとの指摘を受けた。具体的には、ある程度しまった崩れにくい土層に一定の水量が流れで自然流路ができ、その後、埋まる途中で壁面の上がブロック状に落ち込んだり、礫を含んだりしながら堆積、攪乱を繰り返したことである。⁽³¹⁾ また、埋土中に土器が含まれることから、調査区周辺で一次堆積した遺物が、自然流路が埋まる際に土砂と一緒に流れ二次堆積したものと考えられる。

C層（縄文時代から中世以前の遺物包含層）

C層は谷の北側から南側にかけての広い範囲で観察でき、同じような厚さで各土層が堆積していた。包含層内には縄文時代から中世まで多時期の遺物が含まれていたが破片が多く、接合、復元できるものは少なかった。特に土器が多かったのは第19層（極赤褐色土）で、古墳時代前期から中期頃の土師器の甕片、高坏片が出土している。第19層は谷全体に30~40cmの厚さで堆積した土層で、遺物はB4~B6区の谷中央部に多かった。土師器の他に数は少ないが、弥生土器、須恵器、中世以降の土師器、黒曜石も出土している。多時期の遺物が混在して出土していることから、周辺に多時期の遺構の存在が窺われた。第25層（褐灰色土）からは弥生土器と一緒に中世の土師器が出土している。無遺物層直上の第46層からは、団化は出来なかったが、弥生土器と古墳時代中期頃の土器が出土し、古墳時代中期以降の堆積土と考えられ、それ以前にこの谷がある程度堆積していたことが推測された。

後述する集石遺構は第19層上面から検出され、縄文土器から古墳時代の土師器が出土している。

D層（無遺物層）

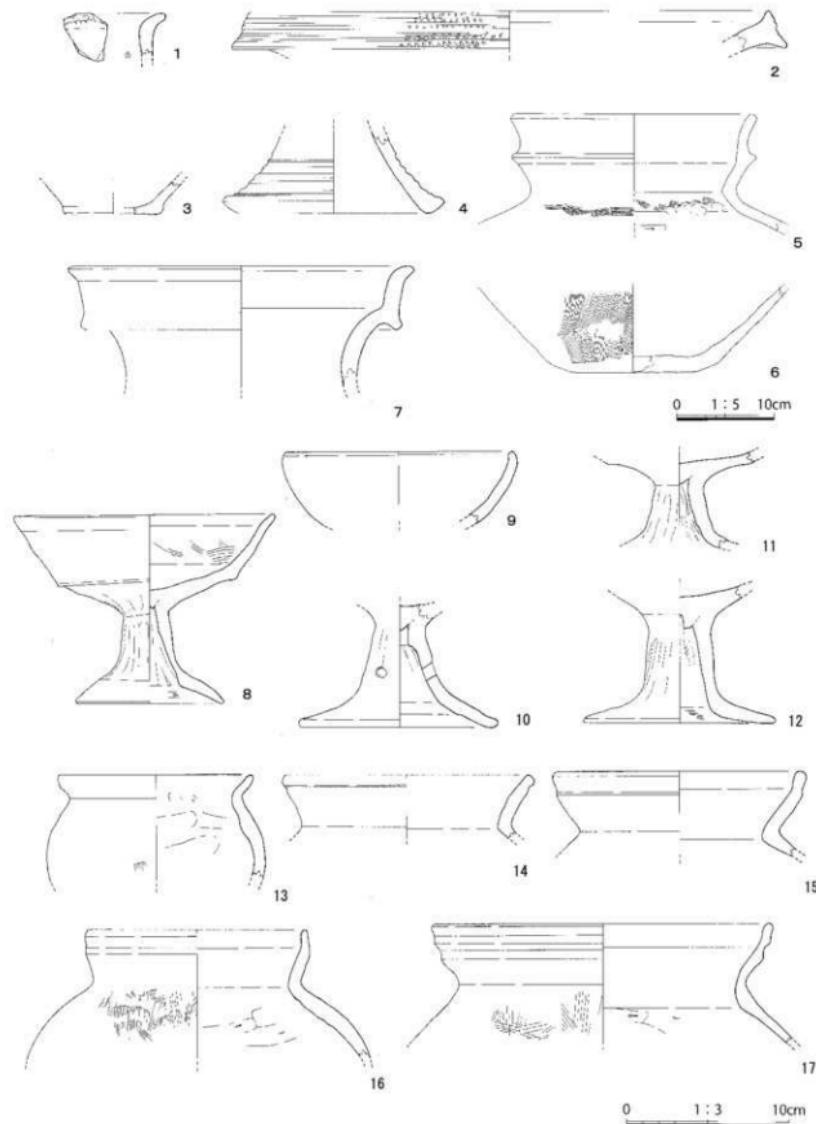
D層の上層（第73層～第109層）は、青灰色～灰色系の還元色の砂質土や粘質土である。これらの土層のなかには緑灰色の玄武岩の風化ブロックや淡緑灰色の砂岩の風化ブロックを含む土層や、礫層と黒色土が攪乱されたような土層もみられることから、これらの土層はある程度の流れによって、周辺の礫や黑色土を巻き込んで堆積したものと考えられた。

D層の下層、特に第110層～第129層は、土層としては上層と同じような青灰色～灰色系の砂質土や粘質土であるが、植物の腐食したものや自然木が多く、それらは下層にいくほど多くみられた。A-A'土層断面ではこのような土層は確認されず、B-B'のあたりが読みになっており、上流から流れてきたものが溜り堆積したものと考えられた。

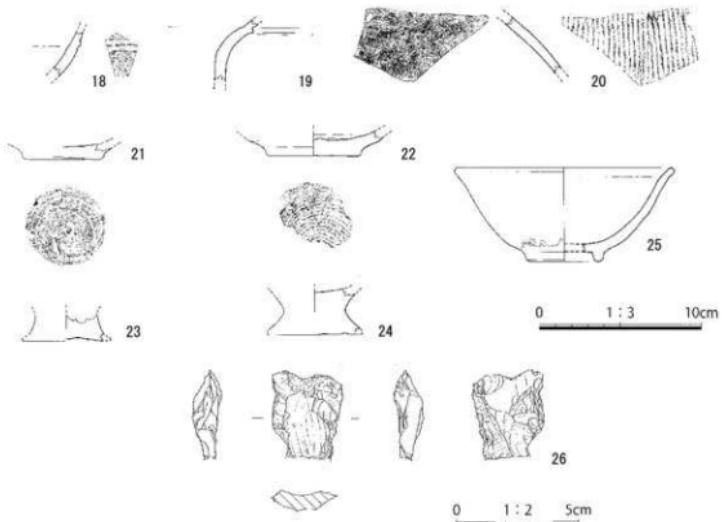
この谷は、浸食、堆積を繰り返しながら自然に埋まっていき、その段階の途中で小さな流路が出来るような状況にあったと考えられた。

3. A～C層出土遺物（第7・8図、図版8・9）

1～7は弥生時代前期から古墳時代初頭の土器である。1は第37層（C層：暗灰褐色土）から出土した甕の口縁である。口縁部がゆるく外反し、口唇部に刻目を施す。内面にわずかにハケ目がみられ、弥生時代前中期から中期初め頃（I-4～II-1様式）のものと思われる。2、4は第25層（C層：褐灰色土）から出土している。2は広口壺の口縁である。口縁端部は上下に拡張して凹線



第7図 北側調査区 A～C層出土遺物(1) (S=1:3, 6のみS=1:5)



第8図 北側調査区 A～C層出土遺物(2) (S=1:2、S=1:3)

文をめぐらし、列点文や刻み目を施す。弥生時代中期後葉頃（IV-1～2様式）のものと思われる。4は高環の脚部である。脚端部は肥厚し、7条の凹線が施される。弥生時代中期後葉（IV-2様式）のものである。3、5、6は第19層（C層：極赤褐色土）から出土した遺物である。3は弥生土器、壺・甕類の底部である。5は複合口縁の甕、6は平底の底部である。外面にハケ目、内面にハケ目、指頭圧痕、ヘラケズリがみられ、胎土、焼成から同一個体と思われる。器壁は厚く、完形なら大型の甕であったと推測される。7は試掘トレンチから出土した複合口縁の壺である。口縁端部は外反し面をもち、下端突出部は下垂する。5～7は弥生時代終末から古墳時代初め頃（草田5～6期）に相当する。

8～17は土師器である。出土した土師器の大半が高环と甕片であった。8～12は高环である。8、12は第19層、9は第11層（C層：黄灰色土）、10、11は第56層（C層：褐灰色土）から出土している。8は坏下部に段をもち、口縁部が外反し、裾部が「ハ」の字状に聞く。坏部外面は風化しているが、内面にハケ目、脚部外面にヘラミガキを施す。古墳時代前期後半頃（松山編年Ⅱ期）のものである。9は内湾しながら立ち上がる高环の坏部で、古墳時代中期前半頃（松山編年Ⅲ期）のものと思われる。10～12は高环の脚部から坏部である。10は脚部3方向に円孔が穿たれ、外面にわずかにヘラミガキがみられる。坏と脚の接続は円盤を充填し、外面に刺突痕をもつ。11、12も同じ接続によるものである。13～17は甕で、13、14、17は第19層、15は第56層、16は第37層から出土している。13、14は単純口縁の甕、15～17は複合口縁が退化したものや痕跡だけのもので、器壁は厚く、胴部内面にヘラケズリ、外面にハケ調整を行っている。古墳時代中期頃のものである。

18~20は須恵器である。18は第19層から出土した低脚無蓋高環の壺片である。2条の沈線の下に波状文を施し、内面には灰かぶりがみられる。古墳時代中期後葉（出雲編年Ⅰ期~Ⅱ期初め頃）のものと思われる。19は第37層から出土した壺・甕類の頸部から口縁で、外面上部に棱をもつ。20は第59層（B層：黒褐色土）から出土した、断面灰褐色の薄手の甕片である。外面には明瞭な叩き痕、内面には當て具痕をなで消した痕跡がみられる。

21~24は古代から中世の土師器である。21、23、24は第19層から、22は第25層から出土している。21、22は回転糸切の皿底部で、底径5cm前後を測る。23、24は柱状高台である。風化しているため調整は不明であるが、11世紀末から12世紀前半頃のものと思われる。

25は第11層から出土した京・信系の陶器碗で18世紀代のものである。浅黄橙色を呈し、外面の高台部分は露胎である。

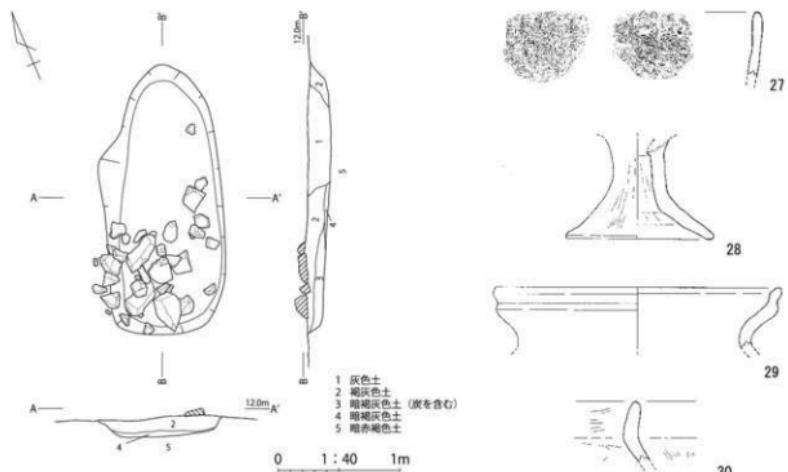
26は黒曜石の石核で、部分的に微細剥離痕がみられる。第19層から出土している。

4. 遺構

集石遺構（第9・10図、図版4・9）

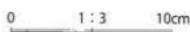
調査区南西側、土層断面第19層（極赤褐色土）上面で検出した遺構である。大きさ10~20cm程度の角礫が出土し、礫の下から長径2.2m、短径1.0m、深さ10cmの浅い土坑を検出した。角礫は南西側に集中し、意図的に置かれたことを窺がわせたが、北西側には見られないことや散乱したようにみえることから、後世の土砂の流失などによって元位置を留めていない可能性も考えられる。土坑の深さから墓の可能性は低いと考えられる。

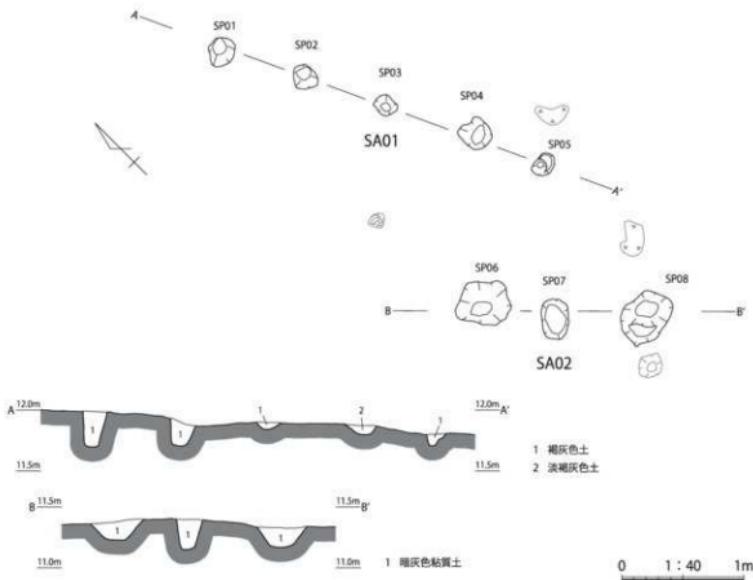
出土遺物は第2層から出土している。27は縄文土器、深鉢の口縁である。内外面とも風化により



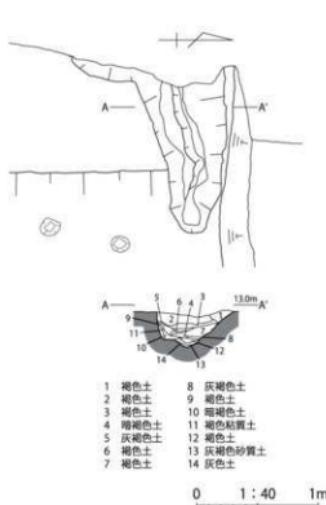
第9図 集石遺構実測図 (S=1:40)

第10図 集石遺構出土遺物 (S=1:3)





第11図 SA01・02実測図 (S=1:40)



第12図 SD01実測図 (S=1:40)

調整は不明であるが、晩期のものではなかろうか。28は高坏の脚部である。外面にヘラミガキとハケ目、内面に絞り痕がみられる。29は複合口縁が退化した甕で、古墳時代中期のものである。30は単純口縁の甕で、肩部が張らずに胴部に移行するタイプの甕と考えられる。口縁内面と胴部外面にわずかにハケ目が、胴部内面にケズリ痕がみられ、古墳時代以降のものと思われる。

土坑は浅く、集石造構の性格は不明である。出土した土器は绳文土器や土師器であるが、基盤層から中世以降の土器が出土しているため、中世以降の造構と考えられる。

杭列SA01・SA02 (第11図、図版3)

谷の南東側に杭列を2本検出した。

SA01は谷の北東から南西に向かって降る標高11.8~12.0mの地山面で検出した。柱穴は等高線に平行して5基あり、北西から南東方向に並んでいた。柱穴間0.66~0.8m、上端径15~25cm、深さ16~28cmを測る。

SA02はSA01の南西側に位置し、第46層（暗灰色粘質土）上面で検出した遺構である。標高11.4m、等高線に平行して、柱穴3基を検出した。柱穴の上端径22~43cm、深さ16~25cm、柱穴間0.58m (SP06~07)、0.78m (SP07~08) を測る。

SA01、02の柱穴は、深さが浅いため後後に削平された可能性が高い。遺物が出土していないため時期は不明であり、同時期のものか、時期差があるものかわからない。

SA01、02の西側及び北側から4基の柱穴を検出した。大きさ、深さ、埋土が違い、規則性もないことから、別の遺構に伴うものと思われる。

溝状遺構SD01（第12図、図版3・4・5）

調査区西壁側、地山面で検出した遺構である。溝は東西方向に延び、西壁際で南側方向に折れ、調査区外へと続いていると思われるが、擾乱により消滅しており、調査はしていない。現状で長さ1.2m、最大幅0.66m、深さ20cmを測り、底面は西側から東側に向かってやや傾斜している。土層断面をみると、流路などにみられる砂を含んだ土層が少なく、水が流れている可能性は低いため、他の用途として機能していた可能性が考えられる。遺物は出土していないため時期は不明である。

溝状遺構の南東側からは6基の柱穴を検出し、このうち2基の柱穴は溝状遺構の近くからみつかっている。規則性がなく関連性はないものと思われ、遺物が出土していないため時期は不明である。

第2節 南側調査区

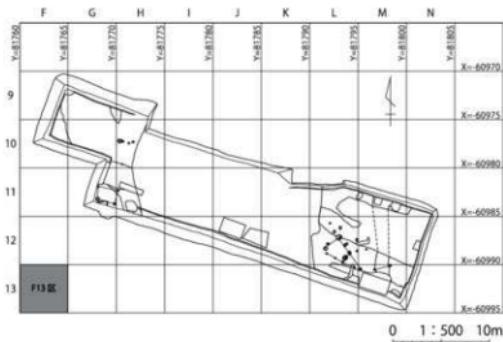
1. 調査の概要（第13・14図、図版6）

南側調査区は、事業範囲の変更によって追加調査を行うこととなった範囲で、北側調査区の南側25mに位置する。調査区は北側40.5m、南側34m、南北約11m、面積421m²を測る。試掘調査において、谷の堆積土の遺物密度は疎であり、北側調査区で検出した密度の高い遺物包含層は確認できなかつたため、柱穴等が検出された西側、東側平坦面のみ調査することになった。調査はまず、現代の擾乱層を重機で取り除いた。地山面が露となる部分や地山が近世・近代の擾乱を受けている部分も認められ遺構の残りは悪かった。谷の堆積土の範囲は、調査区北端で19.5m、南端で19.0mを測

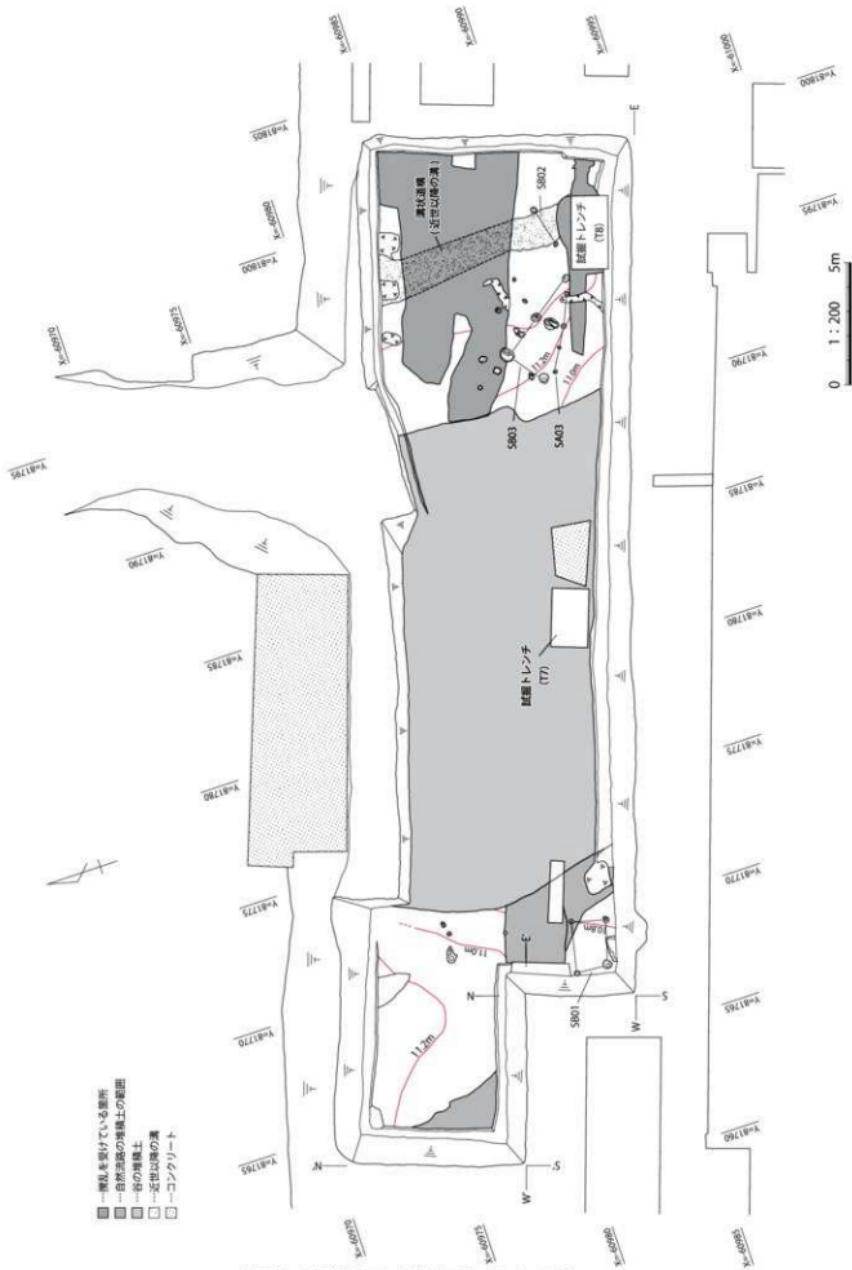
り、北側調査区南端より約8m広くなっていること、南側にいくほど谷が広がっていることが確認された。

調査区の区画名は国土座標のX=-60970、Y=81760の交点を基点とし、行・列共に北側調査区から継続したアルファベット、番号を5mごとに割り振った。

調査の結果、谷の両側に広がる平坦面（地山面）から掘立柱建物跡3棟（SB01・02・03）、杭列1本（SA03）、柱穴12基、溝状遺構

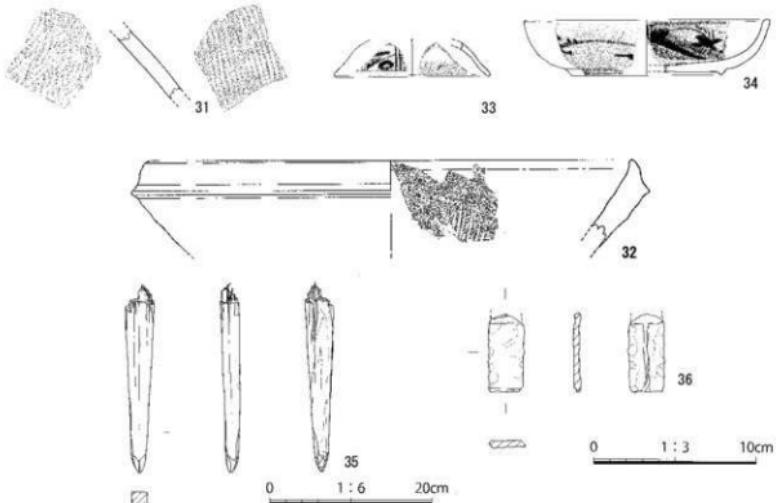


第13図 南側調査区グリッド配置図 (S=1:500)

第14図 南側調査区 調査成果図 ($S=1:200$)



第15図 南側調査区 土層断面図 (S=1:80)



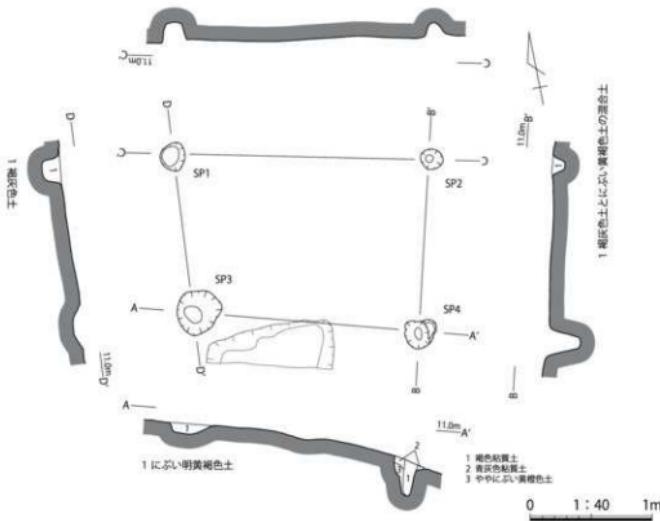
第16図 南側調査区 土層内出土遺物 (S=1:3, 1:6)

1本を検出した。溝状遺構は東側平坦面から検出されたが、埋土中に近世以降の陶磁器が確認され、平面形の図化等の測量を行い、完掘はしていない。

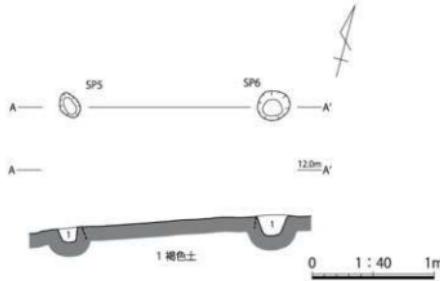
2. 基本層序（第15図）

地表下約0.5～1.3mは搅乱土と地山土（黄白色土）を多く含む盛土（第1層）で、瓦、陶磁器、鉄製品が出土した。搅乱土層直下が地山のところがあり、近世、近代以降に搅乱を受け、遺構が削平（破壊）されたと思われる。第7～10、17層は灰色の粘質土層である。谷部には水平に堆積しており、大正7年や昭和11年の地形図に水田の地図記号がみえることから、昭和14年に病院が建てるまでは水田であったと考えられる。これらの土層からは、近世以降の陶磁器や木製品、瓦、木製品が出土し、近世・近代の水田と考えられた。第10、17層は土質、土色、出土遺物から北側調査区土層断面第7、10層と同層と考えられ、この谷部一帯が水田であったと推測される。第22層（黄灰色土）は、水田以前の堆積土で、須恵器が出土している。しかし、この土層と同層と考えられる北側土層断面第11層から18世紀代の陶器が出土していることから、この土層は18世紀以降の堆積土層と考えられる。第18層は北から南に延びる溝状遺構の埋土で、前述したように近世以降の陶磁器が出土している。

東西の地山面には黒褐色土から暗褐色土の部分がみられた。この土層は北側調査区と同様、裸地化した地面に水が流れてできた自然流路の埋土と思われるが、北側調査区と違って硬くしまった密な土層で、遺物や炭化物が皆無であることから、周辺に人々が生活する以前の堆積土と考えられる。土層断面の第36～40層、第44～54層がそれに相当する。東西の地山面直上から遺物は出土していない。



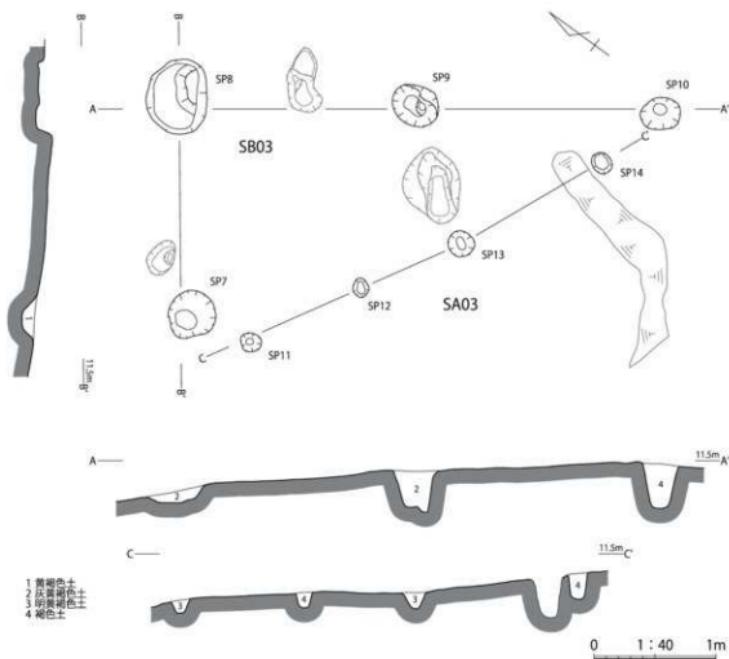
第17図 SB01実測図 (S=1:40)



第18図 SB02実測図 (S=1:40)

3. 土層内出土遺物 (第16図、図版10)

遺物の大半は調査区中央、谷のなか (J11, J12区) から出土している。陶磁器や瓦が多く、その中に土師器の細片が混入していた。31は南壁の第22層（黄灰色土）から出土した須恵器の壺片である。32はJ11区、第17層（褐灰色土）から出土した備前焼の播鉢である。内面に7条の播目がみられ、口縁外面が上方へやや拡張され、下角の垂下と同程度である。15世紀前葉から15世紀中葉頃のものである。33, 34はI11区、第10層（灰黄褐色土）から出土した磁器である。33は肥前磁器で、端反形の蓋で19世紀代のものである。34は蛇ノ目凹型高台の皿で18世紀後半から19世紀頃のものである。35はK12区、第22層から出土した長さ22.9cm、幅3.4cm、厚さ2.4cmの木製品で、先端は加工



第19図 SB03、SA03実測図 (S=1:40)

され、やや尖っている。もう一方は二段の差し込み部で、長さ3.0cmを測る。36はJ12区、第7層（褐灰色土）から出土した残存長4.8cm、幅2.1cm、厚さ0.2mmの鉄製品である。板状の鉄を別の鉄で表側から裏側に折り返し包んでいる。器種は不明である。この他にも図化していないが、昭和16年以降から戦後にかけて生産された統制陶器も出土している。

4. 遺構

掘立柱建物跡SB01（第17図、図版7）

調査区南西側で検出した桁行き1間、梁間1間以上の建物跡である。検出面標高10.8~10.9m、柱穴の上端径15~33cm、深さ8~27cm、柱穴間1.33~2.1mを測る。柱穴軸方向、底面標高や埋土も様々であることから、何らかの建物に伴う柱穴として復原した。また、柱穴は浅いものが多く、検出面より上の遺構面から掘られ、その後削平された可能性が高い。遺物は出土していないため時期は不明である。

掘立柱建物跡SB02（第18図、図版7）

調査区北東側で検出した建物跡である。柱穴2基のみで、柱穴の埋土や底面標高がほぼ同じであることから、建物跡とした。柱穴の上端径と底面標高はSP05が15cm、11.41m、SP06が25cm、

11.46m、柱穴間は1.65mを測り、検出面標高は約11.6mである。遺構面が削平されており、建物の規模や方向、また、遺物が出土していないため、時期も不明である。

掘立柱建物跡SB02（第19図、図版7）

SB02の南西側で検出した桁行2間、梁間1間以上の建物跡である。検出面標高は、11.2～11.4mを測り、等高線に平行している。柱穴間は桁行側2.0m、梁間側1.8m、柱穴の上端径30～45cm、深さ12～35cm、底面標高11.00～11.15mを測る。検出面は北東側から南西側に向かって傾斜し、柱穴も南西側が浅く、遺構面は後世に削平されたと思われる。遺物は出土していないため、建物跡の時期は不明である。

杭列SA03（第19図、図版7）

SB02の南側で検出した遺構で、4基の柱穴を検出した。上端径13～18cm、深さ12～22cm、底面標高11.02～11.13m、柱穴間0.9～1.35mを測り、検出面標高は1.1～11.35mである。P2～P4は浅く、遺構面が後世に削平されたと考えられる。遺物が出土していないため時期は不明であるが、検出状況から切り合い関係にあり、SB03とは時期差があるものと考えられる。

SA03、SB03周辺からはこの他にも数基の柱穴を検出した。柱穴は地山面から20cm以上削られている部分からも見つかり、大きさ、埋土も様々で、深いものが多く、なかには四角い柱穴もみられた。柱穴から遺物が出土していないため時期はわからないが、多時期の柱穴が混在しているものと考えられる。

（註1）島根県立三瓶自然観察ヒメル 中村唯史氏の御教示による。

第4章 まとめ

王子坂遺跡発掘調査では、北側から南側に向かって派生する低丘陵とその谷部の調査を行った。谷部の基盤は10万年以前の火山灰層であり、谷部の形成は古く、その年代は不明である。調査結果から、周辺で人々が生活し始める頃にはある程度埋まっていたものと思われ、その後、浸食、堆積を繰り返しながら遺物包含層が堆積し、近世・近代以降には水田として利用されていた。昭和14年頃病院建設のため丘陵部分が削られ、現在と同じような平坦な地形となったと推測され、この谷の変遷を垣間見ることができた。

北側調査区の遺物包含層からは、縄文土器から近世・近代の陶磁器まで幅広い時期の遺物が出土し、特に古墳時代中期頃の土師器が多かった。なかでも二重口縁が退化した壺や高杯の割合が高く、他に数は少ないが縄文土器や須恵器、中世の土師器や捕鉢、陶磁器が出土している。南側調査区では谷の包含層の調査は行わなかったが、堆積土から須恵器、近世以降の陶磁器が出土し、両調査区の結果から、この付近に多時期にわたり人々の生活があったことを窺わせた。

遺構は掘立柱建物跡3棟、杭列3本、集石遺構1基、溝状遺構1本、数基の柱穴を検出した。集石遺構以外の遺構は本来の地表面が削平されていたため、残存した地山面での検出となり、また、遺構上面を覆っていたと考えられる包含層が失われている部分もあり、遺構内から遺物も出土していないことから、明確な時期は不明である。しかし、建物跡や杭列は柱穴間の距離や向き、覆土の状況から、それぞれ時期を異にするものと考えられる。

北側、南側の調査を総括すると、北から南に向かって派生する丘陵斜面に人々が生活していたと考えられ、そして、それは縄文晩期頃に生活が始まり、古墳時代中期にひとつのピークを迎える、その後も中世から近世・近代と引き続いていることが明らかになった。また、自然流路や水田があつたこと、また、現在でも雨が降ると北側丘陵から多量の水が流れ出すことなどから推察すると、水に不自由しないような場所であったと思われる。

本調査区周辺は、すでに市街地化が進んでおり、遺跡の空白地となっている場所である。しかし、わずかに残った空地の調査では、高い確率で遺跡が発見されている。散布地や古墳は確認されているが、集落跡は発見されていなかった。最近、王子坂遺跡の南側丘陵に所在する後廻遺跡から弥生時代中期末から古墳時代初め頃の集落跡が検出された。王子坂遺跡からも同時期の遺物が出土し、また、後廻遺跡と王子坂遺跡は北側から南側に派生する一連の丘陵上にあることから、弥生時代中期末から古墳時代初め頃には、この一帯に大規模な集落が存在していたのかもしれない。また、出土遺物から、王子坂遺跡周辺には、縄文時代から現代に至るまで人々の生活が連続と続いていることがわかり、乃木地区における集落遺跡の状況、土地利用の解明に重要な成果を提供するものである。

遺物観察表

土器

(北側削面は北側、南側削査区は南側と記載する)

編番号	出土位置	土層	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	胎土	色調	残存	備考
					口径	高さ	底径(楕円)					
1	北側 B1区 (第17号)	粘土層	灰土	壺	—	—	27	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ+ナメ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 深褐色	1.4以下	口縁部外削出し日 1~4~3層式
2	北側 T-2 (第25号)	粘土層	灰土	壺	31.8	—	26	(外) 塗ナデ+凹面文(各 内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1.9以下	口縁部外削出し日 列文式 R-1層式
3	北側 A6区 (第19号)	粘土層	灰土	壺-煮泥部	—	58	20	(外) 風化 (内) 風化	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡黄色 (内) 淡黄色	1.8以下	—
4	北側 T-2 (第25号)	粘土層	高环脚部	—	11.8	5.1	—	(外) 塗ナデ+凹面文7条 (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡黄色 (内) 淡黄色	1.9以下	N-2層式
5	北側 AA-B4区 (第15号)	粘土層	板付灰陶	24.2	—	120	—	(外) 塗ナデ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 灰褐色 (内) 灰褐色	1.4	♀田中期~4期
6	北側 A3区 (第19号)	古式土層	楚泥部	—	11.4	9.0	—	(外) ナメ、塗にハケ目 (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 灰褐色 (内) 灰褐色	1.5	と同一個体
7	北側 試験トレンチ	埋め灰土	古式土層	結合口脚部	26.5	—	7.7	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 水灰色 (内) 水灰色	1.9以下	試験トレンチ(T4)から出土
8	北側 B6区 (第26号)	粘土層	高环	15.8	8.9	—	(外) 塗ナデ+ヘタニガキ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm程度の白色 粉を含む	(外) 水灰色 (内) 水灰色	1.5以下	江戸中期 松山編年Ⅲ期	
9	北側 B4区 (第19号)	土脚部	高环脚部	14.0	—	4.5	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 水灰色 (内) 水灰色	1.2	風化	
10	北側 B3区 (第56号)	土脚部	高环脚部	—	11.8	7.6	(外) ハナナメ、塗 (内) 塗ナデ+前方の工具痕	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.2	自然流路帯から出土 3万件引出式	
11	北側 B3区 (第56号)	土脚部	高环脚部~ 脚部	—	—	6.0	(外) ハナナメ (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 灰褐色 (内) 灰褐色	1.2	自然流路帯から出土	
12	北側 B6区 (第26号)	土脚部	高环脚部	—	11.6	8.6	(外) 塗ナデ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 灰褐色 (内) 灰褐色	1.2	—	
13	北側 B4区 (第19号)	土脚部	壺	12.0	—	6.5	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm程度の白色 粉を含む	(外) 灰褐色 (内) 灰褐色	1.6	—	
14	北側 B4区 (第19号)	土脚部	壺	14.9	—	4.0	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm以下白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.9以下	—	
15	北側 B4区 (第19号)	土脚部	壺	14.8	—	5.3	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	0.5~1mm程度の 白色粉を含む	(外) 黄褐色 (内) 黄褐色	1.9以下	自然流路帯から出土 松山編年Ⅲ(前)~Ⅳ期	
16	北側 B4区 (第27号)	土脚部	壺	13.3	—	7.9	(外) 塗ナデ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.4	松山編年Ⅲ(前)~Ⅳ期	
17	北側 B4区 (第27号)	土脚部	壺	20.6	—	7.4	(外) 塗ナデ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm程度の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.6以下	松山編年Ⅲ(前)~Ⅳ期	
18	北側 B4区 (第19号)	底部	長脚無脚部	—	—	29	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.9以下	(内) 底なし (外) 2条の溝の下に青灰土	
19	北側 T-1 (第27号)	底部	底壓痕部?	—	—	40	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	0.2mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.6以下	口縁外周に接着をもつ —	
20	北側 B4区 (第26号)	底部	壺	—	—	3.5	(外) 塗ナデ (内) 生てこり感をナメする 底	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.9以下	—	
21	北側 B6区 (第26号)	土脚部	直腹部	—	4.7	1.0	(外) 塗ナデ+ナメ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ	0.5~2mm以下の白 色粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.6以下	輪郭の回転方向: 右	
22	北側 T-2 (第25号)	土脚部	直腹部	—	5.6	1.6	(外) 塗ナデ+ナメ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ	0.5~1mm以下の白 色粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.4以下	輪郭の回転方向: 右	
23	北側 B6区 (第26号)	土脚部	柱状台	—	48.0	1.6	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 明褐色 (内) 明褐色	1.4以下	—	
24	北側 D5区 (第26号)	土脚部	柱状台	—	53.0	2.8	(外) 塗ナデ: 底部: 重心に回転 系付直腹	0.5~1mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.4以下	—	
25	北側 B5区 (第11号)	陶器	壺	13.2	4.2	5.8	(外) 塗ナデ: 高部: 薄胎 内: 直腹	0.2mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.5	京・奈良・環 18世紀	
26	北側 重石造道 (第11号)	陶文土器	陶器	—	—	12	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.4以下	—	
27	北側 重石造道 (第11号)	陶文土器	陶器	—	—	12	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	0.2mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.2	—	
28	北側 重石造道 (第11号)	陶文土器	陶器	—	—	8.8	(外) 塗ナデ+ナメ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.6以下	—	
29	北側 重石造道 (第11号)	陶文土器	壺	17.6	—	3.8	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.6以下	松山編年Ⅲ期	
30	北側 重石造道 (第11号)	陶文土器	壺	—	—	3.7	(外) 塗ナデ+ナメ+ナメ (内) 塗ナデ+ナメ+ナメ	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色	1.6以下	—	
31	南側 南壁	灰褐色土 (第22号)	底部	壺	—	5.4	(外) 塗ナデ (内) 有てこり	0.5mm以下の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.6以下	延喜甲子本 1120~1150年	
32	南側 J1区	灰褐色土 (第19号)	陶器	瓶体	29.8	—	5.6	(外) 塗ナデ+ナメ (内) 塗ナデ	1mm以下の白色 粉を含む	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.9以下	延喜丙午本 1160~1190年
33	南側 J1区	灰褐色土 (第19号)	粗底	壺底	9.4	—	2.1	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	底部の凹面を ナメる	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.6以下	延喜丙午本 1160~1190年
34	南側 J1区	灰褐色土 (第19号)	粗底	壺	14.8	9.1	3.4	(外) 塗ナデ (内) 塗ナデ	底部の凹面を ナメる	(外) 浅褐色 (内) 浅褐色	1.6	延喜丙午本 1160~1190年

石製品

編番号	出土位置	土層	種類	法量(cm)			重量(g)	石材	残存	備考
				残存長	最大幅	最大厚				
26	北側 K12区	灰褐色土 (第19号)	石块	3.7	—	2.9	12.06	墨晶石	一部欠損	—

木製品

編番号	出土位置	土層	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
				残存長	最大幅	最大厚		
35	南側 K12区	灰褐色土 (第22号)	不明品	22.9	—	3.4	24	先端を锐尖状に加工し、もう一方は二段の差し込み足あり。

写真図版



南側調査区から東側を望む
(松江医療センター病棟屋上から)



北側調査区 調査前全景（北東から）



北側調査区 調査後全景（松江医療センター病棟屋上、南西から）



北側調査区西側 調査後（南から）



南壁土層断面（北西から）



南東側 SA01・02、柱穴（南西から）



西側 SD01、柱穴（東から）



集石遺構 環検出状況
(北から)



集石遺構 完掘状況
(北から)



SD01 土層断面 (東から)



SD01 完掘状況（東から）



遺物検出状況



遺物検出状況



南側調査区 調査前全景（北東から）



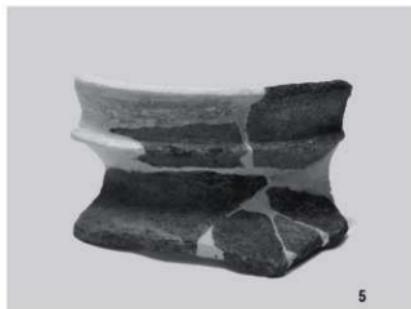
南側調査区 調査後全景（松江医療センター病棟屋上、西から）



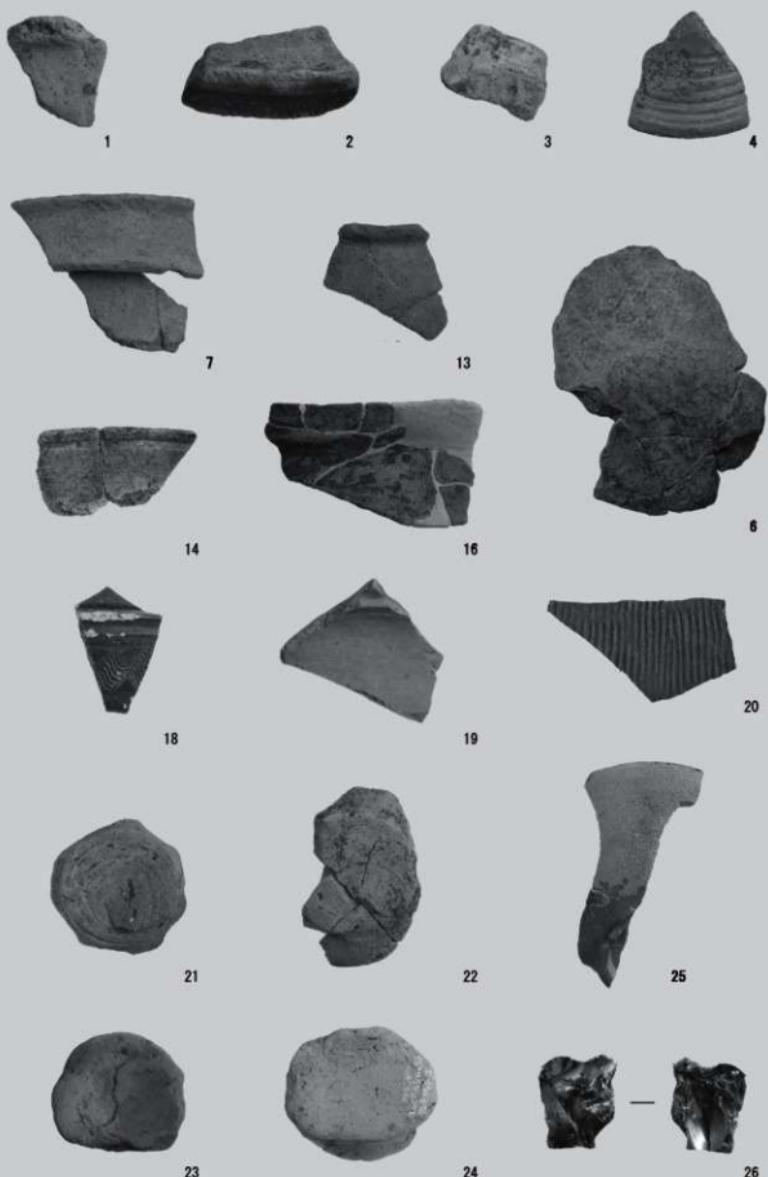
西側 SB01、柱穴（南東から）



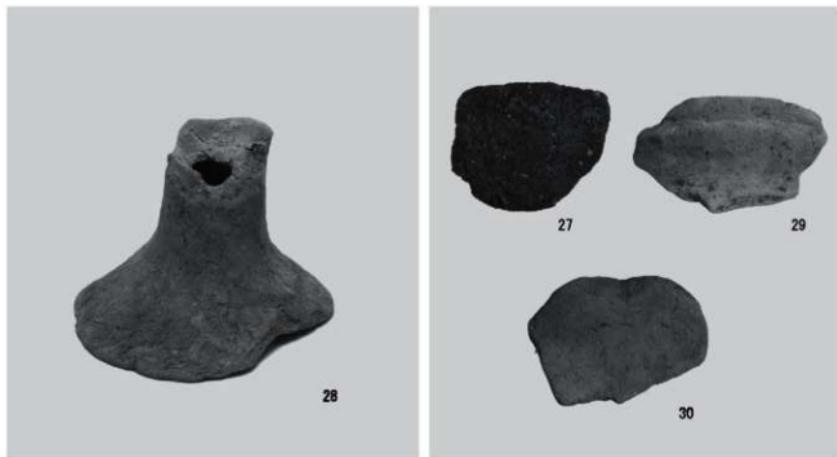
東側 SB02・03、SA03、柱穴（南西から）



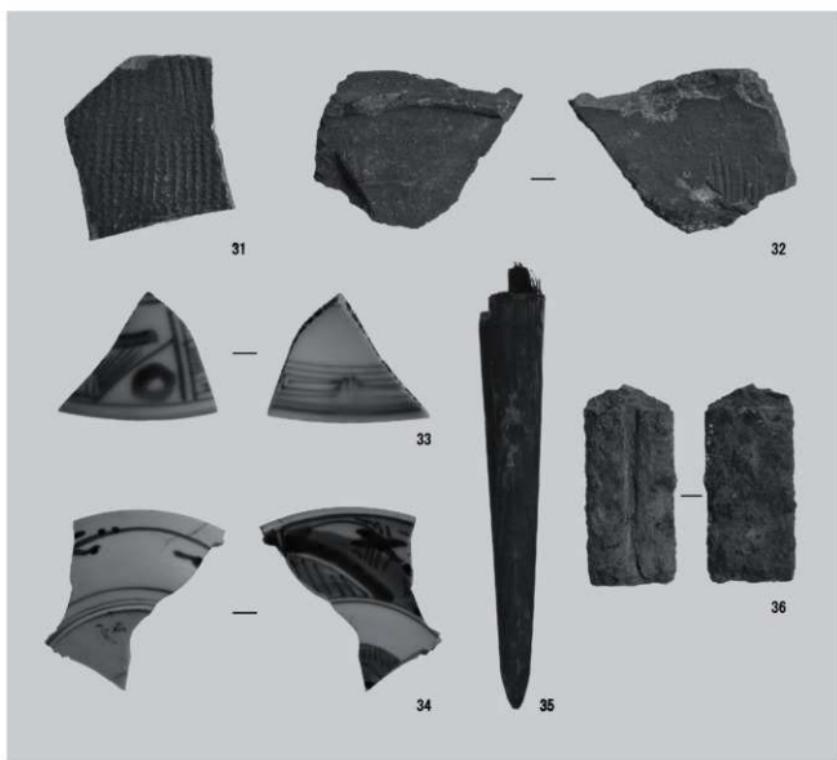
北側調査区 A～C層出土遺物



北側調査区 A ~ C 層出土遺物



北側調査区 集石遺構出土遺物



南側調査区 土層内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おうじざかいいせきはっくつちょうさはうこくしょ						
書名	王子坂遺跡発掘調査報告書						
副書名	国立病院機構松江医療センター外来管理診療棟等建替整備工事に伴う						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第147集						
編著者名	廣濱 貴子						
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地	〒690-0826 烏根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F TEL: 0852-55-5284 (文化財課) 〒690-0401 烏根県松江市烏根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210 (埋蔵文化財課)						
発行年月	2012年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
おうじざかいいせき 王子坂遺跡	島根県 松江市 上乃木 5丁目 483番	32201	D1095	35° 26' 50" 133° 04' 03"	20110411 ～ 20110617 20111003 ～ 20111104	1,093m ²	国立病院 機構松江 医療セン ター外 来管 理診 療棟等 建替 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
おうじざかいいせき 王子坂遺跡	散布地	縄文時代 から近世	掘立柱 建 物跡 集石遺構 溝状遺構 柱穴	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 木製品 鉄製品	縄文時代から近世までの土器が出土し、特に古墳時代中期の土器が多くあった。遺構は丘陵斜面から掘立柱建物跡や杭列を検出した。		

王子坂遺跡発掘調査報告書

平成24年（2012年）3月

発行 松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 明和印刷有限会社